

大正六年十二月五日發行

婦人子ども

第十七卷

第十二號

フレイベル會

婦人と子ども

第十七卷  
第十二號

目次

冬の繪本(スチヴンソン).....

遺傳と保育.....醫學博士 永井 潜

福島縣 第八回 保育界の模様.....

幼稚園教育の科學的研究の前途.....紹介 子

雜 錄.....

色彩の心理.....菅原 教 造

# もど子と人婦

號二十第卷七十第

行發日五月二十年六正大

## 冬の繪本

夏がうつろひ、冬が来る—  
霜の朝々、凍る指  
窓の駒鳥、冬がらす、  
さて繪の多い物の本

凍つた水は石のやう  
上を歩けばコチくと。  
しかし小川は流れてる、  
繪本の中に流れてる。

きれいなものは残つてる、  
羊も飼<sup>かひて</sup>者も樹も枝も、  
子供の眼をば待つてゐる、  
繪本の中で待つてゐる、

近い町々、遠い海、  
それらは皆何うしたか、  
お伽の姫は何うしたか、  
繪本を見れば皆わかる。

—スチヴンソン—

# 遺傳と保育

—フレールベル會總會講演筆記大要—

醫學博士 永井 潜

今日は山内博士のお話がある筈でありましたが山内博士は御都合によつて今日御出席になることが出来ませんでした。而して山内博士の代りとして私がこの演壇に上ることゝなりました。私にとつては非常なる光榮と存する次第であります。

乍併、私の専門と致して居る所は幼児教育と全然關係がないわけではありませんが、私は平生特にその方面を研究して居りませんので一應おことわり致したのであります、それでも是非話して頂けるやうにと倉橋さんから御依頼がありましたので兎も角今日出席することに致したのでありますさういふ譯でありますから特に問題を選ぶといふやうなことは私には出来ません、幸ひ山内博士の

「遺傳と保育」といふ問題が既に定められて居るさうでありますから、それを拜借して暫時お話ししてみやうと思ひます。演題は等しく羊頭でありますけれども内容は狗肉でありまして、頗るまづいのでありますから、その邊は始めからおことわり申して置きます。

さて、遺傳ヘリテイティが保育ナチュアか、自然ナチュア(nature)か養育ナチュア(nurture)か、更に遺傳ヘリテイティが環象エンバイロメント(environment)か、これはあらゆる人事の上に重大な關係を持つて居る問題であります。内に重きを置くか外に重きを置くか、心を貴ぶか物を貴ぶか、これは昔から相争つて來て今日に至るも未だ決せられない二つの對立であります。内に重きを置くものは形而

上學の學者、哲學者であります、外に重きを置くものは自然界の現象を對象とする自然科学者であります。

内と外、これは常に相争つて來ました、而して今も相争ひつゝあります。近世に至り、自然科学が發達するやうになつてからは外を貴ぶ傾向が著しくなつて來ました、この主物的な潮流に壓倒されて本來主心的なる哲學者間にも外に重きを置くやうな人々の出て來たといふことは頗る注目に値ひすることでありませう。

抑も斯る氣運を促したものは何であるかと申しまするに、それはカントの哲學であります。カントは唯理派と經驗派とを合してそれまで種々に紛糾してゐた諸哲學説を統一した偉大なる哲學者であります。カント以前には、心は外物を寫すものである、故に立法者は外にあるのであるといふ説が行はれてゐたのであります。カントはこの説に反對して立法者は我である理法をつくるのは我の

心であると主張したのであります。

カントのこの説は自然科学者の所説に有力な根據を與へることになりました。獨逸のヨハネス

ミュラーは特殊の感覺は外界の刺戟の性質の相違に依つて生ずるのでなく、外界の刺戟を受ける我によつて生ずるのである、即ち電氣が眼にあれば色となり、鼻にあれば匂ひとなり、耳にあれば音となると説いたのであります。これはカントの、法を立てるものは外にあらずして内にあるといふ説を十分説明することになるのであります。

例へば筋肉ならば如何なる刺戟を加へられても、すべてそれを伸縮及び熱として感ずるのであります、各の機關はそれ／＼それに固有なる反應しか呈さないものであります。

近世に至り諸種の微菌が發見せられ、微菌學が發達すると共に醫療法も進歩して來ました。

元來病ひは何故起るか、この問ひに對して昔は病の神があつて、それが人間の體に宿つて害を爲

すのであると説明したのであります、この考へは今日といへども未開人の間には行はれて居るのであります。この考へは病の神といふやうなものを認めてゐるのですから我より以外のもの、即ち外を重く見て居る考へ方であります。而してこの考へ方は黴菌の發見によつて益々有力な根據を得て黴菌即病ひといふことになつたのであります、而して黴菌は言ふまでもなく我以外のものであります。

ロベルト・コツホは黴菌學の方では忘るべからざる學者であります、コツホは一八八二年には結核病の黴菌を發見し、一八八三年には獨逸政府の命を受けて、印度に赴き、その當時同地に猖獗を極めてゐたコレラを研究しました、その結果コツホはコレラ菌を發見して、歸國の後これを發表したのであります。然るにケツテンコーヘルはコツホの所説を反駁しました。コーヘルに依ると病氣の起るのは特別な病原體に依るのではなく、下水

や天候の加減その他に因るのであると言ふのであります。この論争はかなり烈しくなりました、而して結局コーヘルは黴菌を呑んでも病氣にならないことを證明するために自らコレラの黴菌を呑んだのであります。この時、コーヘルは自分はコレラの病原菌を呑むが何も輕卒に這麼所行を敢てするわけではない、若しこれによつて自分がコレラに罹ればコツホの正しきことが證明され、罹らなければ自分の正しいことが證明せられるからであると言つて自若としてコレラ菌を嚙下したのであります。

然らば結果は如何といふにコーヘルはたゞ下痢を起したゞけでありました、この事は有名な事實でありまして、黴菌を持つてゐても病氣になるのは限らないといふことの證明となるのであります。よく新聞などに見える保菌者即ち菌の携帶者と云ふものがありますが、保菌者は直ちに病者であると考へて了ふのはいけないのであります、保菌

者であつて遂に病氣を發することなしに濟んで了

ふものもあるのであります、併し保菌者は自分で病氣に罹らない場合でも微菌を諸方へ撒きちらして歩くので隔離の必要や何か起つて來るのであります。それは兎に角、コーヘルの決死的實驗によつてコレラの病原體は必ずしもコレラ病と同一ではないといふことが分つたのであります、この理によつて結核菌即ち結核病といふやうなことも言はれない譯であります。尤も是等の菌が病原となることはあります。しかしこれが入れば必ず病氣になる——菌即ち病氣といふやうに解釋するのは間違ひであります。

生理學者が死體を解剖して見ますと死者の九六パーセントは結核菌を現に保持してゐるか、又は嘗つて保持してゐたといふ所見を呈して居るのであります。然るにも拘らず、すべての死者の中で結核病で死ぬものは八パーセント位しかないのであります、この事實は菌即ち病ひとみることの早

計であることを物語つて居ります。

菌即ち病ひでないといふことはもう一つ他の側からも説明されます、それは一つの菌が或る動物の體内に入つて病氣を起す原因となることがあるにも拘らず、その同じ菌が他の動物の體内へ入つた時は少しも病氣を起させないといふ事實であります。例へば破傷風の微菌は人間の體内へ入ると破傷風の原因となつて脊髄や神經系統を害しますが、この菌が鶏の體内へ入つた時は何の害をも爲さないのであります。

微毒の微菌はスピロヘーテバルリダといふのであります、これは人間と猿とに對しては微毒の病因となりますがその他の動物に對しては傳染性が尠いのであります。微毒といふ病氣が起るためにはスピロヘーテバルリダの存在といふことも必要であります、同時に他の素因ファクターも必要であるのであります。

微菌學の進歩に伴うて血清學が起りました。而

してその結果は反つて内の大切であることが判明して來ました。

ダーウキンの從兄弟にゴェルトンといふ人があります、この人は仔細なる實驗を経た後に、大きな両親からは大きな子供が生れ、小さい両親からは小さい子供が生れるといふことを知り、淘汰によつて大きな男女を選んで結婚させたならば、其の子供には大きな者が生れ、更に其の中から大なる者を選んで結婚させ、斯くて段々に淘汰作用を繰り返せば、漸々に其子供を大ならしむることが出來ると言ひました。

斯くて、ダーウキンの説いた如く、外界に於ける變動が影響して、生物の變化を喚び起し、而して自然界に行はるゝ淘汰作用によつて、適者のみ生存して、其の變化を後代に遺傳し、斯くて進化の原因をなすといふことは、ゴェルトンの研究によつて更に確實なる證明を與へられた者と信ぜらるゝに至つたのであります。

然るに、茲にゴェルトンの此の注意すべき研究も實は大なる誤に陥つて居ることが最近に至つて指摘せらるゝことゝなりました。此の一大新研究を成就したのは、丁抹の植物學者ヨハンゼン其人であります。氏は豆に就て實驗を試みました。即ち最初一握の豆を蒔いて、外界に於ける種々なる條件の結合の結果として、大小不同の收穫を得ましたが、次に其の中から大なる豆を選択して蒔くと此の第二代目の收穫の大きさの代表的平均價は、第一代目の者に較べて稍々大きくなり、次に其の中から更に大なる豆を選んで種子とすれば、第三代目の收穫の平均價は、第二代目のよりも、更に大きくなり、斯くて淘汰作用によつて、順次に豆をして大きくならしむることが出來るといふことを實驗したのであります。こゝまでいへばヨハンゼンの得た試験の成績も亦、一見すれば、全然ゴェルトンの結論に一致するかの如くに考へられるのであります。



併しながら、此の結論を急ぐことの代りに、ヨハンゼンは心の中に「待て」と叫んだのであります、而して更に慎重なる態度を以て此の問題を解決しました。ヨハンゼンに依つて始めて心附かれた大切な事は、如斯き實驗を行ふに當つては、其の材料が始めから純粹な系統でなければならぬといふことであります。即ち彼の所謂純系統を選んで試験材料としなければ試験の結果は頗る不正確であります。何んとなれば、豆の例に就て考へますのに、既述のヨハンゼンの實驗の如く、委細構はず一握の豆を蒔いて、之を出立點として、試験を始めると、其の種子豆は決して純系統でなく、種々雑多の系統が含まれて居ります。茲に於てか、第二代目に得らるゝ大なる豆は大なる豆を結ぶべき系統のものに屬して居るのであるから、隨て、之を種子豆とすれば第三代目には大きな豆が收穫せらるゝのは當然のことであります。故に此場合には淘汰作用によつて、吾人は單に雜然た

る系統の混合して居る中から、大きな豆を結ぶべき一系統を抜き出したといふに過ぎないのであつて、決して之を以てダーウキン及びゴェルトン等の考へた如く、淘汰作用によつて、小さい豆を結ぶ者を變化せしめ、大なる豆を結ぶものと成したとは言へない譯であります。

斯様な理由の下に、ヨハンゼンは一握の多くの系統の混在せる豆を種子とすることの代りに純系統の豆を種子として試験を行つてみました。純系統の材料を得るといふことは植物にあつては比較的容易であります。即ち幾代かを通じて、嚴格に自個受精を行はせて出來たものは何れも同一の遺傳物質を具へ、隨て純系統に屬すべきものであります。斯くて純系統の豆を種子として試験した結果によると、其の種子豆として重い豆を選んだ場合でも、將た軽いのを選んだ場合でも、其の收穫の重さの平均價は依然として同一であります。換言すれば、純系統に對しては淘汰作用は何等の影

響のないもので、淘汰作用によつて純系統の性状を變化させることは全然不可能であることを確め、ゴエルトンと正反對の結論に達したのであります。されば外界の影響に依つて起る變化は淘汰作用を施すことによつて、之を子孫に助長せしむることが出来るかといふに、決して左様でありません。畢竟、淘汰作用なる者は許多の系統が雜然として混つて居る中から純系統を選び出すことには役立つが、併し淘汰作用を利用して、外界の影響によつて起つた變化を助長せしめ、漸次に一定の方向に種性を變へやうと云ふことは到底不可能のことであつて、此目的に向つて淘汰作用は何等の效をも奏することが出来ない者たることが明瞭になりました。茲に於てか生物進化の事實を説明すべくダーウキンによつて打ち建てられ、而して多數の生物學者が今猶金科玉條と頼める議論、即ち生物の進化には外界の影響が大切である。外界の變動は生物體に一定の變化を喚び起す者で之に淘汰作

用が加はると一定の方向に著るしく生物を變化させて茲に生存の優者たる新種を現出せしめる。而して是れ即ち進化の原理であるとの議論、並びに此の議論に向つて事實上の裏書を與へんとしたゴエルトンの嶄新なる研究も、ヨハンゼンの破天荒の研究によつて、根本から轉覆させられたのであります。

晩近生物學の立脚地より斷案を下して申しますと、生物の進化に取つて大切なるものは外界の影響及び淘汰作用の如き外的條件ではなく、實に種性夫れ自身てふ、內的條件であります、而してこれは實に人類永遠の向上發展を期すべき人種衛生に向つて動かすべからざる基礎となるものであります。以上に於て變化の現象及び淘汰作用の價值には遺傳の現象に關して大略を説いてみやうと思ひます。

遺傳の現象に關して根本的説明を與へたのは埃

國アルトブリユンの僧侶グレゴール・メンデルであります。メンデルに依つて吾人は如何なる両親の間には如何なる性質の子供が、而かも如何なる數の割合に於て出来るかを、數學的の精確を以て豫想し得るに至り、加之、之に向つて數理的の説明を與へ得るに至りました、メンデルの此の重要な學説は之を次の三つに總括することが出来ません。

第一には遺傳物質の獨立に關する法則であります、この法則に従へば遺傳物質なる者は恰も化學者の唱ふる原素に比較すべきもので、離合集散はするが其の本性は變化しない。而して此の種々なる遺傳物質が澤山相寄つて生物の身體を造り上げる、其の關係は丁度色々な材木が寄せ集められて一個の寄木細工を造ると同様である。隨て吾人は彼を抜き是を加へ、遺傳物質の配合によつて、種々なる形質の變化を起さしめることが出来るといふのであります。

第二には、遺傳物質は相互の間に關係があつて同一體内の相匹敵せる遺傳物質が一緒になると、一つが他の爲めに蔽はれて、現はれて來ない。其の現れて來ない方を劣性と云ひ、現はれる方を優性と唱へるのであります。例へば紅い花の豌豆と白い花の豌豆との間に雜種を造ると其者は悉く紅い色を着けます、即ち紅が優性で、白は劣性なのであります。これを優性の法則と唱へます。

第三には斯く優劣の關係があつて此の兩者が同一の生殖細胞體内にあると優性は現はれ、劣性は隠れるけれども、然し遺傳物質は何處までも獨立性を失はないのであるから、優劣兩性の遺傳物質が別々の生殖細胞内に入る機會があると一旦隠れた劣性も再び現れて來ます。これを別離の法則と唱へます。例へば上述の豌豆の花の色に就て言ひますと、雜種第一代の紅のものは紅（優性）と白（劣性）との兩遺傳物質を有つて居ます、隨つてそれから出来る全生殖細胞の半數は紅の遺傳物質

を、半數は白の遺傳物質を有つ譯でありますから雜種第一代の紅のものを婚清させますと(一)双方から紅の遺傳物質を有つた生殖細胞が相寄つて純然たる赤が出来る場合が一つ、(二)一方からは赤、一方からは白の遺傳物質を有つたものが相寄つて劣性白が蔽はれ紅が出来る場合が二つ、(三)双方から白の遺傳物質を有つたものが相寄つて純白が出来る場合が一つ。都合赤三つ、白一つの割合で一旦隠れた白なる劣性が再び現れて來ます。即ち雜種第一代の紅同士を互に婚清させても其の子の全數の四分の一は白い花を咲くものが出るのであります。是等の關係は數學上の理論から豫想した所と統計上得られた事實とが符節を合したる如くに一致するのであります。

以上の三大法則はメンデルの名譽のためにメンデルスムスと唱へられます、而して後に至つて多少の改良が加へられましたが遺傳の研究が進めば進む程、一見メンデルスムスと矛盾して到底此の

學說では説明が出来ないと思はるゝ事實も何れもメンデルスムスで解釋することが出来るやうになつて、メンデルスムスは日一日と其の價值を高め今や進化論と其の光彩を争ふに至りました。

然らば即ち人間に於ける遺傳は如何と云ふに矢張其の研究が進んで來れば来る程メンデルスムスに依つて支配されて居ると云ふことが證明さるゝに至りました、元來人間の遺傳の研究には幾多の困難が横つて居ります、其の第一は人間に在つては動物の様に勝手に甲と乙との間に子孫を作る譯には行きません、第二には人間は發育して生殖を爲すに至るまでに長い年月がかかる、故に一人の學者、一代の仕事では到底充分なる成績を擧げることとは出来ません、第三には人間の遺傳に於ては其の關係が非常に複雑して單に皮膚の色、毛髮の色、の如きものでさへ澤山の遺傳物質が相集つて出來て居るのであります、殊に又病氣等の遺傳でありますとそれが現はれ来るまでに早く死んだりす

る場合があつて確實な統計を取ることが困難であります。凡て是等の困難あるが故に人間の遺傳に關する研究は未だ漸く其の緒に就いたばかりであります。

扱て又、茲に一言せねばならぬ大切な一大問題があります。それは何であるかと云ふと一代の間に得たる形質の變化が後代に遺傳するや否やの問題であります。輓近に至るまで多くの學者は一齊に此事を可能であると考へてゐたのであります。

若し此事が可能であるならば吾人は外界の諸條件を變化せしめて、生物の形質に變化を起さしめ、更に遺傳の力を假りて、子孫に其の變化を傳ふれば外的條件の變化によつて自在に生物を變化せしめ得る譯であります。現にラマークやダーウキンが進化の事實を説明せんとして打建てた學説は何れも之を基礎として居たのである。然るにワイズマン出で、先づ之に對して疑を挟み、外界の變動によつて、一代間に得たる形質の變化は後代に遺傳せずとの結論を下しました。爾來此の種の重要

なる問題は幾多の學者によつて論難されて居ますが輓近の一般生物學、就中遺傳學の進歩の結果としてワイズマンの結論は動かすべからざるものと認定さるゝに至りました。

もはや時間もありませんからこの講演を終らうと思ひますが簡單にこの講演の結末を申述べやうと思ひます。

茲に一粒のさくら草の種子があります、これはその有つてゐる遺傳物質によつて紅にも咲き、白にも咲き得るのであります、即ち普通ならば紅に咲くのでありますが溫度が高いと白に咲くのであります。若しさくら草に取つて白い花を開くことが理想であるならば白い花を開かせるやうにする外界の條件が缺けてゐてはいけません。

茲に於て外的條件がかなり重要な役目を負はせらるゝのであります。我々はこれまで自然力の理解に努めて、その理法を悟り、これを我々の生活の便宜に利用し來つたと同じやうに、これから後は遺傳を理解し、遺傳の利用を俟つて教育が益々効果的に行はれてゆくことを望むのであります。

(文責在記者)

# 第八回 福島縣 保育會の模様

福島縣保育會に於ては十一月十、十一の兩日に亘り第八回縣保育會を開催したり。次ぎに録載するは同會の順序及び同會提出問題に對する郡山幼稚園と二本松幼稚園との答案なり。

十一月十日

一、實地保育參觀(午前八時半ヨリ四十分間)

一、會 議

1 開會(午前九時半) 會場 二本松第二小學校

2 開會ノ辭並ニ祝辭

3 研究

4 協議

5 談話又ハ實驗談

休憩(晝食)

6 實地保育ノ批評會(午後一時ヨリ)

7 談話又ハ實驗談

8 遊戲實習 二時間(午後二時十五分ヨリ)

閉會(午後四時十五分)

閉會後遊戲交換

一、通俗保育講演會(午後六時半ヨリ) 二本松第一小學校

十一月十一日

一、遊戲講習

開會(午前八時半)

1 理論ノ講話 一時間

2 實習 二時間

休憩(晝食)

3 實習 二時間(午後〇時半ヨリ)

閉會(午後二時半) 以上

問題

一、研究題

1 幼稚園に於ける祝祭日及滿了式等の儀式を

幼兒本位に舉行する良法如何(喜多方幼稚園)

2 保姆を年齢上より見たる得失長短如何(若

松幼稚園)

3 幼兒に對し方言を矯正する必要の有無及其

程度如何(同上)

4 積雪の場合に於ける遊園の利用法如何(須賀川幼稚園)

5 幼稚服裝の標準につき特に研究せられたる様式如何(二本松幼稚園)

6 幼稚園に於て設備すべき適當なる運動器械の種類製作注意及其效果如何(同上)

7 幼兒の「トラホーム」濕瘡「シラクモ」に對する適當なる處置如何(福島幼稚園)

8 幼稚園に於て飼育するに最も適當なる動物即ち簡易にして費用を多く要せざるものは何々なるか(同上)

## 一、協議題

幼稚園保母養成機關を設けられんことを縣知事に建議する件(郡山幼稚園)

## 一、談話題

1 幼兒個性の矯正助長につきて實施せらるゝ良法承りたし(郡山幼稚園)

2 會集の方法承りたし(同上)

3 如何なる砂場が最も幼兒の遊びに適するか築造の方法承りたし(福島幼稚園)

4 大人じみたる幼兒の取扱につきて(實驗談) 保母松山いね

5 幼兒具體性の一例(實驗談)

6 恩物六毬の使用法を承りたし(喜多方幼稚園)

7 雨天の際室内に於ける遊び方につきて其良法を承りたし(同上)

8 幼兒の習慣につきて(實驗談) 保母須子とみ

## 一、遊戯交換

大正幼年唱歌 第七集 お星様 第九集 イ

ルミネーション等につきて唱歌遊戯御研究の園  
あらば承りたし又交換したし(喜多方幼稚園)

以上

# 研究の結果

## 郡山幼稚園答案

### 研究題

◎幼稚園に於ける祝祭日及満了式等の儀式を幼児

本位に舉行する良法如何(喜多方幼稚園)

幼稚園に於ける儀式を別ちて二つとする、一は

祝祭日に於ける儀式、一は満了式に於ける儀式

これである。

本題は幼児本位に舉行するといふ點を主眼とす

るのであるから、以下其積りで述べて見やう。

そして儀式は又これを舉行の形式より見たるも

のと幼児の心理上より見たるものとの二方面か

ら研究することが出来る。

### 第一、祝祭日の儀式

祝祭日の儀式は壯嚴を旨とするから形式上に於

ては相當に嚴肅なるを要す。

一、舉行の形式上より見たる點

1 國旗の掲揚と國旗の昇騰(國旗の掲揚は

殊更に言ふまでもない、國旗は平素使用の

ものを避けて儀式用特製のものを幼児と共に

昇騰したい。

2 裝飾 室の内外の裝飾は平素と異りて莊

嚴の氣を呼ぶだけのものを要する。

3 排列 幼児の排列は平素の圓形を避けて

小學校的に縦隊にするを可とする。

4 勅語奉讀 國民として是非なかるべから

ざるもの。

5 最敬禮 御眞影を奉戴せざる園にては宮

城の方向に向ひて遙拜する。

6 服装着袴を本位とする

### 二、幼児の心理上より見たる點

1 式時間 擧式の時間は長くとも三十分間

を極度とする。

2 着席 幼児の着席し終るまでは模擬をな

さしむる。



3 園歌 同歌は園精神の歸結であるから儀式中に合唱せしむる。

4 唱歌 同詞は幼兒に適したるものを撰ばねばならぬ。

5 講話 幼兒の心理を解せざる人の講話は成るだけ避けたい、さうして其講話も成るべく簡單なるを要す。

6 用語 訓示及講話に於ける用語は幼兒の解し得らるゝ平易のものでなければならぬ

7 其他 (イ)入場前に幼兒の小用を便せしむること。(ロ)紀念すべき菓子を與へる。

(ハ)紀念菓子は來賓及職員の手より贈與する。(ニ)式後は遊戯をなさしめたい。

## 第二、證書授與の儀式

満了式は園兒の最も愉快とするものなれば壯嚴の中にあたゝか味を加へたものにありたい。

### 一、舉行の形式上より見たる點

1 國旗及園旗 祝祭日と同様。

2 裝飾 室の内外は祝祭日よりも更に温味の加はりたる幼兒らしき裝飾をこらすこと

3 排列 祝祭日と同様なれども満了幼兒はすべての動作に都合よき處を撰ぶこと。

4 勅語奉讀 祝祭日と同様。

5 報告 要點を印刷に付し置きて來賓保護者に配り式中には省略するか若くは大體のみを報告すること。

6 證書並賞狀賞品授與 幼兒各自に與へ總代を舉げぬこと。

7 服裝 祝祭日と同様。

8 招待員 保護者 幼兒直接關係者(小學校職員隣地の方々)等を招ぐ。

### 二、幼兒の心理上より見たる點

1 式時間 成る可く短時間に終らしめ長くとも一時間を超えぬこと。

2 着席 祝祭日と同様。

3 園歌 園旗の昇騰降納又は其他の場合に

合唱すること。

4 唱歌 祝祭日と同様。

5 用語 祝祭日と同様。

◎保母の年齢上より見たる得失長短如何 (若松幼稚園提出)

人間の眞價否人の働き振りは年齢の多少によりて一概に定むることは出来ぬ。其人の精神如何によつては年齢若くとも老者を凌ぐものがあり年老いたりとして若年のもの、及び難き人もあるされど強て本問題を研究すれば我幼稚園としては普通一般的に老若の大體より其得失長短とも見るべき點を列擧しに過ぎない。

老者に對する研究

○得とする點

一、精神方面より

1 注意周到

2 常識圓滿

3 技能圓熟

4 幼兒取扱親切

5 判斷力決斷力あり

6 幼兒の性情に通ず

7 禮儀作法正し

6 其他 祝祭日と同様なれども更に紀念寫

眞帖在園中の製作物を配布すること。

○失とする點

1 研究心乏し

2 愛嬌に缺くるあり

3 我意を張ることあり

4 小刀細工に陥り易し

8 質素にして着實

二、身體方面より

- 1 鍛練されるものあり
- 2 身體の變化少し

三、家庭方面より

- 1 家庭的に幼児を取扱ふ
- 2 境遇上の變化少し

四、社會方面より

- 1 比較的社會の信用あり
- 2 社交的態度に通ず

五、經濟方面より

- 1 經濟思想に富む
  - 2 廢物を教育に利用す
- 若者に對する研究

○得とする點

- 1 體力不十分のため幼児の相手に不足なり
- 2 些細の故障にもよく缺勤することあり
- 3 元氣なきため活潑なる遊戯作業に不十分な

り

- 1 早歸遲參多きものあり
- 2 缺勤勝なり
- 3 勉強の時間少し故に學力退歩の恐れあり

- 1 社交的關係多きために公私を混同し社會の  
物議を惹起することまゝあり

- 1 經濟にとらはれまゝ人後に落つるの恐れあり
- 2 年功の上より報酬過分なるあり

○失とする點

一、精神方面より

- 1 向上進取の心強し
- 2 愛嬌多し
- 3 熱心になり易し
- 4 命せられたることをよく實行す

二、身體方面より

- 1 元氣旺盛にして幼児の相手によし
- 2 病氣により缺勤すること少し

三、家庭方面より

- 1 係累なきため専心精勤なること
- 2 勉強の時間あり

四、社會方面より

- 1 向上進取の心強きため社會に認めらるること早し

---

1 不注意にして常識に乏し

2 判断力決断力に乏し

3 動搖の性多し

4 感情に支配され易し

5 悲觀厭世の風生じ易し

6 氣力に乏しきことあり

7 兎角に外形を装ふ傾向あり

---

1 生理上の故障より幼児に對し苛酷に失することあり

1 勤續年數少し

---

1 大局に着眼せず

2 風紀問題を起し易し

3 威信を落すことあり

## 五、經濟方面より

### 1 薄給にて雇ふことを得

◎ 幼兒に對し方言を矯正する必要の有無及其程度

如何 (若松幼稚園提出)

方言とは何ぞや一地方に限られたる特有の言語である。

これが研究は地理的方面からも歴史的方面からも實に興味の津津たるものがあつて捨て難いものであるされど本問題は性質上そのやうな専門的研究に走る事は許さぬよつて暫く幼兒の方言を矯正する必要の有無及其程度如何について研究を試みやう。

一、國家と方言 國民思想の統一上より論じたならば一地方に限られたる方言は是非とも矯正して一定したる標準語に改むべきが至急であらふ而してそれが又國家の要求する所であらねばならぬさりながら一方民族的結合が方言によつて

### 1 經濟的頭腦杜撰なり

### 2 廢物を教育的に利用する考薄し

保たれたる事實を知らば一概に方言矯正を叫ぶべきものでなからふと思ふ況して方言は一地方に瀰漫し衍布しあるもの一、二の人の力で到底矯正し盡し得べきものではない何は兎もあれ方言の利害より考へて見やう。

二、方言の利害 理想より言はゞ所詮方言は矯正すべきもの矯正されべきものであらふ、けれども前項の如く捨て難きふしもあり矯正され難き事情もある、まして地方的見地よりはなかく利益とする點もあるのである。

### 1 方言の利とする點

イ 方言には實に一種いふべからざる興味があり融和力がある

ロ 方言は地方通用上實に普遍的であつて便利である。

ハ 方言は地方の團結力をして強固にする。  
ニ 方言は幼年少者の理解力を速ならしむ。  
等これである。實に地方的範圍が狭いのは仕方がない而して方言の害は確に國家的で關係する處が廣い。

## 2 方言の害

イ 方言の瀰漫は國家の大統一を缺く。  
ヒ 方言の固執は大團體の結合を弱くする。  
ハ 方言の使用は自然に個人を偏狹ならしむ  
ニ 方言は處世上に不便不利を醸すことが多  
い。

而してこの方言なるものを幼兒の境遇より見る時は如何であらふか。

三、幼兒の境遇上より見たる方言 方言は國家から見ると矯正すべきものであるが之を幼兒の境遇上より見ると矯正する事の甚だ至難で寧ろ矯正の必要なしと云ふて然るべしと思ふ。

由來方言の如き一郷一地方に涉りての省俗は一

人一個に關せる缺點短所とは違ひ小人數の力にては如何ともする事の叶はぬものである。大厦の將にくつがへらんとする一木の得て支ふべからざるは理の當然である。

若し眞に方言矯正を望むならば大々的に一地方の各種團體等大舉してこれに當るべきものである。勢力微弱なる幼兒に迫りて方言矯正の害をあげんとするは大海の水を小貝にてすくふが如きものである決して幼兒をせむべきものではない。試に幼兒の境遇を見よ家庭にありても地方にありても勢力殆ど皆無にして僅少なる幼稚園の幼兒が正しき言語を用ふることありとしても家人も郷黨もどしどし遠慮なく方言を使用するならば如何彼れは忽ち軟化されて幼稚園が施したる切角の骨折も全く無効となり甚しきは衆人の嘲笑を買ふことがあるであらふ。さすれば幼兒は自然正語を用ふるを避くるに至るであらふ幼兒は先生の命を守らんか衆人の嘲笑を如何と

いふ様な殘酷なるはめに陥り案外なる苦痛を感じるに至るであらふと思ふ故に我幼稚園は幼児に方言矯正を強ふべからずと思ふのである。されど誤る勿れ敢て方言使用を奨励せんとするものではない大に方言矯正に心掛けそれ／＼手をつくす所あるべきである。果して然らば方言に對して保姆のとるべき態度は如何。

四、保姆と方言 保姆は幼児の師表となるべきものである。幼児に對しては常に師範を示さねばならぬものである、言語の如きとりわけ正しき標準語を使用して幼児に應對すべきものである彼の模倣性に富める幼児がその信賴せる保姆の一言一句にいかにかに耳を傾け深き注意を拂ふであらふぞ保姆の正しき用語は不知不識の間に幼児の言語を形成するものである。されば保姆たるものその使用すべき言語は正しき標準語であらねばならぬ然る時は幼児の方言も自然に矯正されて正しきものに導いて居られるものであるこ

とを忘れてはならぬ。正に矯正を強ふる前に正しきを示すべきである。

五、方言矯正の程度 幼児の方言は奨励すべからざるものにしてよろしく矯正すべきものなりとせばいかなる程度にこれをなすべきか、次に來る研究すべき問題である。

今其程度如何につき重なるものを左に列舉して見やう。

1 通用範圍の極めて狭きものは之を矯正すべし。

2 野卑なる方言は矯正すべし。

3 方言を使用せるものありとてこれを犯罪視すること勿れ。

4 幼児の知識經驗に適合したる方言は默許して可なり。

5 幼語と方言とを混同する勿れ幼語を使用するは毫も差支なきことなり。

6 而して方言を直下に矯正することなきも正

語を會得せしむることに怠るべからず。

◎積雪の場合に於ける遊園の利用法如何

(須賀川幼稚園提出)

冬季に於ける積雪は天より興へられたる趣味と實益とに富む自然の恩物である如何に相當なる設備を有する園と言へども之を利用することがなかつたならば幼児に對して誠に罪なこと、思ふ故に積雪の場合には我幼稚園に於ては次の如き方法によつてこれを利用し幼児の身心を鍛錬しこの意味ある恩恵に報いつゝあるのである。

一、男幼兒の遊戯 男幼兒の遊戯とはいふものゝ、女幼兒が出来ぬといふことではない。ことゝ場合によつては女幼兒にさせて差支ないばかりが大に喜んでするものである。

1 雪だるま 主として協同的に作製せしめ、幼兒相當の考案を施さしむ而して「雪だるま」の唱歌を合唱して快を盡さしむ。

2 雪投げ 幼兒は天性活動的なものであるか

らこれによつて勇壯活潑なる精神と小さな護國の精神とを涵養することが出来るこの場合に於て女幼兒には雪丸の製作に當らしめ舉國一致といふ崇高なる精神をも養ふことが出来る。

3 雪の山 幾つかの雪だるまを作りそれを集めて空所を巧に他の雪にて埋め大なる雪山をつくらしめるのである工夫創作の想を涵養することが出来る。(女兒を加へて共に作らしめてもよい)

4 雪のトンネル 雪の山同様に工夫創作の想を練るに適應するものであるそのトンネルが大なれば大なる程快哉を叫ばしむるに足るそしてこれを利用していろいろ遊戯も出来る。

二、幼兒の遊戯 女幼兒とは云ふものゝ前同様男幼兒にも行はせて興がるものが多い。

1 雪つり 木炭或は松笠などを糸にてつるし雪をつり上げて大なるものにするが面白いの



である手指は凍えて冷たからふにそれさへ打  
忘れて競ふて大ならんものを作らふとする他  
所目に見るもやさしきあそびである。

2 雪搔き遊び 男幼児も好むが女幼児には尤  
も相應しいあそびである雪べらを以て少しば  
かりの雪をすくひ上げては散らし又ははき寄  
せて嬉戲するのである。

3 雪兎 盆か板の上に兎を作つて遊ぶもので  
ある女幼児の遊びとしてば誠にやさしい。

三、男女幼児の協同作業 雪はきは公共思想の涵  
養にもなるから是非させたいこれには或る指導  
のもとに保姆も幼児と共に作業するのである、  
道路庭園といふ太した事でなくとも軒下玄關前  
などを掃くのであるこれがために玩具として子  
供用の雪べらを園に二三十本備へておく。

○幼児服装の標準につき特に研究せられたる様式  
如何 (二本松幼稚提出)

幼児の服装については各園特殊の意見があつて

種々な様式をとつて居る様である我幼稚園にて  
は設立の當時より幼児は筒袖に帯を締め白のエ  
ブロンをかけ必ず草履を携帯するといふことに  
きめて置いたので今はそれが當園の制服といふ  
風になつてしまつた。今左に當園に於ける服装  
の一般を具體的に述べさうして少しばかり研究  
したことを参考のため掲げて見やう。

一、服について

1 服装 園児は一般に筒袖を着、帯を締め白  
のエブロンをかけて居る。

2 エブロンの地質 木綿(天竺)が最も優良で  
あるからこれを奨励して居るネル、キャラコ  
でも差支はない。

3 袖 幼児の運動及作業を敏活ならしめんが  
ため筒袖となし長袖の如きは絶対に禁止して  
おく。

4 帯 園児には皆帯を締めさせて必ず後にて  
結びしむ一體帯を結ふといふことは幼児はか

りでなく誰でも其精神を端整ならしむる上に  
功果がある。

5 儀式の服 男女とも着袴を本旨として居る  
尊嚴なる儀式には平素と異つた氣分を持たせ  
たいからである。

6 研究せる服 黒の洋服裏地を用ひフレーベ  
ル館考案ものをよしとして居るが經濟上から  
容易の事でないので未だ採用しないで居る。

二、帽子に就て 當園にては未だ實施しては居ら  
ぬが遠からず男幼兒に向つて制帽を冠らせたい  
と思ふて居るその帽子は幼兒らしきものをしや  
うと考案中である。

三、草履に就て 當園では上下二足を携帯せしめ  
ておく。

1 上草履は家庭に於ても必ず履かしめ疊敷の  
清潔を保たしめなくてはならぬわけて便所に  
於て上草履の使用を忘れてはならぬ。

2 下草履は運動を敏活になし得るの便がある

ばかりでなく危険を避くることが出来る。

注意 遊戯室に於ける跳躍運動を行ふ場合に  
は上草履をぬかしめて居る。

四、徽章 園の徽章は是非制定してほしいものだ  
これによつて園精神の歸結が出来るつまり徽章  
は園旗の縮小で實に尊いものである。これを男  
子に用ひてはその帽子を飾り女子に用ひてはそ  
の胸を飾るのである。

◎幼稚園に於て設備すべき適切なる運動器械の種  
類製作、注意及其效果如何

(二本松幼稚園提出)

本研究題は幼兒保育上については一時も忽にす  
ることの出来ぬもので一朝一夕に解決すると云  
ふことは容易な業ではない。しかし乍ら本縣下  
の趨勢を見るに幼稚園は年を追ふて増加し今や  
十四かになり居るもの故これが研究をせぬとい  
ふことは由々しい大事といふべきであるしかる  
に我縣保育會にてはこゝに着眼せられ本題につ

き研究することゝなつたのは實に斯道のため喜ぶべきことであらうと思ふ。それで我幼稚園に於て目下研究しつゝあるものを室内と室外とに別ち又更に團體と個人とに區分し以下列舉し參考に資せんと思ふのである。

### 第一、室外に於ける運動器具

一、團體的に使用するもの

1 競争に屬するもの

イ 綱引 製作上強き綿糸を以て繰り成る

べく細きを可とす効果は言はずとも忍耐

心と共同一致心とを養ふ。

2 協同的に屬するもの

イ シングルベルス 革製の紐二人若くは

三人にてお馬どうくをして遊ぶもの。

ロ 鐵砲。

ハ 旗。

ニ 押車 種々のものを載せて運搬して遊ぶ

ものである。

ホ 大積木 煉瓦大の木製積木で、お家や汽車やトンネルなどを作つて遊ぶのである。

ヘ 陸上ボート これはフレイベル館發賣のものを買ふたのである、三人乗りて數人曳くやら押すやらして遊ぶもの故、これ一つの器でなかく多くの人を遊ばせることが出来る。

ト シーンソー これは俗にいふきいこばつたんである一臺八人位遊ぶことが出来るが往々怪我をするので危険である、監督者が付いて居らない時には使用させぬがよい。

二、個人にて使用するもの

1 競争的に屬するもの

イ 目方俵(力俵と稱す) 持ち運びて又は

上下に支へて遊ぶものである力をためしたりすることも出来る。

2 單獨にて遊ぶもの

イ ブランコ 高さは八尺を超えてはなら

ぬ、七尺位の低きもので一臺に數人用ひらるゝ様にしつけるがよろしい綱は鎖よりは麻糸がよい様である、そして朝夕よりはづしが出来る様にした。

ロ 迂り臺 高さは五尺位をよしとし勾配は緩急二種ある方がよい様である。

ハ 旗。

ニ トロツコ これは石や土や器具をのせて引き回す車である時に幼兒を乗せたがることもあるが往々危険が伴ふからそれはさせぬがよい。

第二、室内外に於ける運動器具

一、團體的に使用するもの

1 競争に屬するもの

イ 綱引。

ロ 輪投。

2 協同的に屬するもの

イ 毬。

ロ 大積木

ハ 室内シーソー 二人にて向ひ合ひて乗るもの、これを使用する時には監督者がついて居るとよろしい。

二、個人にて使用するもの

1 競争に屬するもの

イ 金輪 使用法如何によりては團體的に用ひることも出来る。

2 單獨にて遊ぶもの

イ 迂り臺 室内用として、仕組みはつしの出来るものがよいフレーベル館製のものなど案外安價であるからよろしい。

ロ 毬 これは用法如何によりては團體的にもなる由來毬用法は範圍極めて廣く幼兒にとりて實に有益な玩具である。

ハ 室内ブランコ これは鴨居から下げ得

らるゝ簡單なものが最もよろしい。

以上は極めて大體の調査であるがこれは研究を積めは實に有益な又樞要な問題であらふと思ふ他日機會を得て發表する事があらふ。

◎雨天の際室内に於ける遊び方につき其の良法承りたし  
(喜多方幼稚園提出)

雨天の際に於ける遊ばせ方については何處の幼稚園にても困つて居るといふことは今更に申迄もない事である活動的なる可憐の幼兒を雨のため終日閉ちこめて天真の性狀を發揮せしめずにおくといふことは、誠に保育の任にあるものゝ忍びがたきことであるがさればとて彼等の活動に任せて跳奔飛躍をほし、いまにさすることも躑上よりはた規律の上より決して喜ぶべき現象ではないよろしく方法を講じて良法を案出すべきものであらふと思ふ。そこで我幼稚園では左の如き方案の下に現に實施しつゝあるものがあるから参考のために種類と注意とを列擧して

見やう。

一、室内あそびの種類 其種類に至つては随分多くあらふけれども重なるものを擧ぐると次のやうである。

1 男幼兒の遊び 兵隊ごっこ、樂隊ごっこ、毬なげ、角力あそび。

2 女幼兒の遊び 毬つき、お手玉、雛様あそび、飯事あそび。

3 男女幼兒共通の遊び 改良二り臺、室内シンナー、室内ブランコ、椅子とり、輸入れ、綱引、繩とび、旗取り、力競べ、毬かくし、鬼ごっこ、かごめく、子をとりく、地藏さんかへ、電報あそび、猫屋ごっこ、繪本を見る、黒板書き方、學校ごっこ等。

二、遊び方の分類 これを分類すると器具及玩具を使用するものと、せざるものとの二つとすることが出来る。

1 器具及玩具を使用する遊び

イ 男幼兒のあそび 兵隊ごっこ、樂隊ごっこ、毬なげ。

ロ 女兒のあそび 毬つき、お手玉、雛様あそび、飯事遊び。

ハ 男女共通のあそび 改良入り臺、室内シスター、室内ブランコ、綱引、旗取、椅子とり、輸入れ、繩とび、黒板書き方、飯事遊び、力くらべ、繪本を見ること、○蓄音機を用ひて一同に傾聴せしめ或はその機械によつて運動せしむ。

等でこれに對しての注意は次の如くである。

イ 器具又玩具の使用の取扱ひ方は、十分に知悉せしめおく、かゝることによつて他人のものは丁寧にせねばならぬといふ精神が養はれる。

ロ 保母はよく指導しよく監督をせねばならぬ。

ハ 弊害に陥らざる限りは干渉することなく

幼兒をして自由に活動せしむること。

かゝる際に幼兒の個性は觀察され保育の目的は貫徹される。

ニ 使用後は必ずよく始末せしめ整頓の思想を養はしむ。

2 器具を使用せずしての遊び この遊びは大抵男女共通のものである只角力あそびだけは男子の特有であるがこれとて女子を觀覽者として中々に遊ばれる。

鬼ごっこ、子をとろく、かごめく、地藏さんかへ、電報ごっこ、兵隊ごっこ、天子様ごっこ、猫屋ごっこ。

等でこれに對しての注意は次の如くである。

イ ある程度迄は遊び方を指導するを要す。

ロ 弊害に陥らざる限りは干渉することなく幼兒をして自由に活動せしむ。

ハ 幼兒のあそびに保母が加はるはよけれど保母が中心とならざるやうにする。

三、幼兒の好むあそび 以上のやうに二十七種からのあそびをあげたが我幼稚園の幼兒が如何なる遊びを最も好むかといはゞ改良より臺、綱引毬つき、毬なげ、毬かくし、黒板に書き方、繪本を見ること、兵隊あそび、角力、かごめく、地藏さんかへ、鬼ごっこ、輸入れ等である。

## ▲研究題に對する意見▼

### 二本松幼稚園

研究題に對しては成るべく口述によりて意見を發表したき考なれども都合により要領を摘記して口述に代へ申候

1 祝祭日及滿了式等に儀式を行ふに方り兒童本位になさんとするには凡そ左の條によるべきものと考ふ。

(イ)式場の裝飾をなるべく壯嚴に或は優雅に爲すこと、(ロ)訓辭は成るべく簡單にして趣

味あらしむる様話材と話振に注意すること、(ハ)成るべく短時間に終了すること、(ニ)式後尙興を添ふる爲記念品を與へ時々遊戲唱歌等を催すこと

2 保母の年齢上に於ける長短得失は凡そ左の如きか

イ 年若き保母の長所 1 概して活動性に富めること、2 未だ稚氣を脱せざるため幼兒の心情に共鳴し易きこと、3 以上の特質により幼兒より親まれ易き傾向あること。

ロ 同上短所 1 深慮に乏しく用意周到ならずして躑上に定見を缺き易きこと、2 幼兒に過失の起り易き傾きあること。

1 年長けた保母の長所、(イ)用意周到なること、(ロ)父兄母姉の信頼厚きこと、(ハ)躑上主義の確立せること。

2 同上短所 (イ)動もすれば活氣乏しくなること、(ロ)幼兒の性情に遠かり徒に世話焼に

過ぐる傾あること。

3 幼児に對し全然方言を矯正せんとするは不可能なるべく但方言中の卑言はなるべく早く矯正するを可とす 假へば女兒などが自分のことを「おれ」といひ人のことを「にしゃ」などと稱する如き或は長者に對して應答するとき「はい」といふべきを「うん」といひ「さうだ」などといふが如きは是なり其他發音の訛りは早くより矯正する必要あり殊に本縣にては「し」と「す」、「い」と「え」、「ち」と「つ」の如き之なり之等は特に發音練習をなすを可とせん。

4 積雪の場合に於ける遊園の利用法として幼児の事故余り鍛練の事も致し難ければ先づその利用法としては左の諸方法かと思ふ。

(イ) 幼児を手傳はしめ雪達磨を造りて賞翫すること、(ロ) 雪玉を造り與へ目的に對して雪投げをなさしむること等。

5 服裝の標準につきては未だ十分に研究したる

考案もなければ凡そ左の條件に準據することにしては如何と思ふ。

(イ) 男女兒とも白の前掛を用ふること、(ロ) 袴は式日の外は可成用ひしめぬこと、(ハ) 肌着は緩なるものを用ふること、(ニ) 帽は炎天又は禮装の場合の外成るべく用ひぬを可とすること、(ホ) 「マント」は仕立方を改良したき事、(ヘ) 足袋は寒氣強き季節の外可成用ひざるを可とすること(男兒は殊に然り)。

6 幼稚園に於て設備すべき運動器械につきても未だ十分なる實驗を有せず唯從來使用し來れる主なる器械につきては凡左の如く考へ居れり。

(イ) 「ブランコ」は室内室外共に可なり(效果全身運動—快活)、(ロ) 木馬(效果全身運動—活潑)、(ハ) 綱引(效果全身運動—殊に腕—活潑、協同)、(ニ) 紅白の大輪(效果手足ノ運動—快活)、木銃ト背囊(效果全身運動—活潑) シングルベルス(效果全身運動—快活、協同)



其他幼稚園に設備し有效なるべしと思はるゝは

(イ)立棒、(ロ)吊繩、(ハ)階段、(ニ)大砂場、  
(ホ)固定手均臺等とす。

7 幼児の「トラホーム」につきては園醫に特別治療を請ふか或市内の醫師は園兒小學兒に限り特別廉價の治療をなすべく協定するを可とす(二本松町にては園兒小學兒童に一回の治療費金參錢の定なり)濕瘡の如きは坐席を隔離すること手拭運動帽の共用を禁すること「シラクモ」も之に準ずること但此兩者に對しては園醫に請ふて塗薬を用意し毎日塗り與ふるを可とす。

8 幼稚園等にて飼育し易き動物は先づ兎ならんか但未だ經驗したるにあらず。

○編輯だより

△いよ／＼、本年最終號たる十二月號の編輯を終りました。何うしたものが本年は無據事情の突然することが多くて數回に亘り發行日を遅延せしめたことは深くお詫びを致さなければなりません。紋切型ではありますが記者はこの年末に際して特に明年度からの新しき努力奮進を聲明して置きたいと思ひます。

△毎に讀者の渴仰の中心となつて來ました菅原先生の「色彩の心理」はいよ／＼本號で一先づ切り上げることとなりました。先生は尙その材料の大部分をお残しになつて居るのでありますが御多忙中を大層長く御執筆下さいましたし又雜誌の卷數も改まりますので惜しき御講義の續講を無理にお願ひすることが出来なくなつたのであります。しかし先生には來年も筆硯を新にして大いに本誌のために御盡力下さるさうでありますから先生によつて増す所の本誌の光彩の失はれる憂ひは毫も無之ことゝ信するのであります。(記者)

# 幼稚園教育の科學的研究の前途

ダビッドソンに據る

## 紹介

モンテッソリーに對して兎角の批評はあるものの同女史の幼稚園教育の上に爲した貢獻は非常なものである。女史は目的に於て、氣分に於て、將又

見地に於て、科學者の持つ謙抑と寛濶と利害の念を混へない熱心とを人道主義者の持つ溫き同情心とを最も悦ぶべき仕方にて結びつけてゐる。女史が生理學、心理學及び其他の科學を教育的研究及び實際の基礎として十分に尊重し且つ考慮したといふことは後進に對して甚だ適宜の前例を示したと言ふべきである。兎に角、モンテッソリーに依つて、科學を尊重し、科學的研究の結果を用心深く保育界にも應用しなければならぬといふことが一般保育界に了解されるやうになつて來たのであ

る。モンテッソリーが幼稚園教育の研究に最も進んだる態度を紹介するために無雙の努力を爲したことは吾々の十分に感謝せねばならぬ所である。

モンテッソリーに就てはこの位にして置いて、更に幼稚園教育の科學的研究の前途は如何といふ問題へもう一層徹して行くことゝする。

この點に關しては吾々は亞米利加の科學者ウィットメル教授から多大の示唆を受けるのである。ペンシルヴェニア大學の教授なる同氏はその著「學校と社會」に於て多くの有益なる言説を爲してゐる。同氏の言説には背景がある。科學と保育とを有利に關係させ得た點に於て同教授の右に出づるものは亞米利加に於ては絶無である。同教授は

十二年間も進みの遅い幼児の研究と訓練とに費した。同教授は精神的に將又身體的に缺陷のある兒童に對して一種の心理學的の臨床講義を案出して之を數千の兒童の上に實驗してみた。同教授は斯る兒童に對して經驗のある教師達を助手に使つて、注意深き診断を施した後、自らこれらの兒童の級を管理した。最高の實驗的價値を有する知識を以て適當な訓練が與へられ、中止され、吟味された。斯る兒童に對しては教師は科學者を兼ねなければならぬといふモンテッソーリの考を十分に具體化したのはこのウイットメル教授である。

同教授は言ふ――

要するに、私の考は若しも教育といふことが立派な職業となり醫藥と同じやうに社會的價値を認められやうとするならば、教育的實習は心理學に於ける科學的基礎の上に立たなければならぬといふことである。更に又心理學が教育的實習に於て

科學的方法を應用し得るやうな有望な、頭のいい、學生を大學教育の一方面に得やうとするならば、他の學問的職業から取り殘された人々を迎へるだけで満足してはいけない。心理學的な教育を受けた先生を得るためには特にさういふ教育設備が準備されなければならない、而してその年限は何うしても四ヶ年を要すること、思ふ。斯くして得られたる先生は進みの遅い兒童を導くことが出来る。若しくは一人々々に導かねばならないやうな兒童を保育して行くことが出来るのである。進みの遅い小學兒童の面倒を見て行くのと幼稚園の幼兒を保育して行くのとは略ぼ似寄りの仕事である。

ウイットメル教授の意見は大體上の如きものであるが私は斯る目的の爲めに大學が女流教育家、殊に保姆のためにその門戸を開放され、十分の研究を遂げしむるやうにされたいのである。(完)

○東京女子高等師範學校附屬

幼稚園主事の更迭

東京女子高等師範學校附屬幼稚園主事安井哲子氏は十月二十六日辭任せられしを以て同氏の後任として同校教授倉橋惣三氏十一月五日就任せられたり。

○大阪に於ける律動的遊戯講

習會

律動的遊戯の創始者たる東京市麴町小學校長兼麴町幼稚園長土川五郎氏は十一月十九日より五日間大阪市西區保育會主催の講習會に於て律動的遊戯の講習を試みられたり。

○玉成保姆養成所生徒募集

私立玉成保姆養成所にては四月新學年よりの生徒募集を開始せり。修業年限は一ケ年、毎日の授業午後二時より同五時まで、高等女學校卒業者又は尋常小學校の準教員の資格ある者にして同所を卒業せしものには東京府より無試験檢定にて保姆の免許狀を下附せらる。入學志願者は東京市麴町區上二番町三十六番地(電話、番町一八一番)なる同所々長ソフアヤ・アラベラ・アルキン嬢宛照合せらるべし、因みに同所の授業課目及び受持職員左の如し

母ト子ノ遊戯、フレイベル恩物會集、プログラム、手工

ソフアヤ・アラベラ・アルウキン

教育、心理 東京高等師範學校講師文學士 田中寛一

動物、植物 東京女子高等師範學校助教授 平島權藏

保育衛生 醫學士 宇都野研

談話 早蕨幼稚園長 久留島武彦

圖畫 東京府青山師範學校教諭 赤津隆助

手工 東京府青山師範學校教諭 下川兵次郎

音樂 東京音樂學校教務囑托 原みち

體操、遊戯

生花 ガーバリン大學體操科學士 メリー・エイチ・マクローイ  
清芳流投入教授家元 鈴木健太郎

# 色彩の心理 (六)

菅原 教造

## 三十 單獨對比と復合對比

上來二十六章から三十章に亘つて、第一表に示した分類に從つて、光の對比と色の對比の種類を別々に述べて來た。即ち對比の種類は第一表によれば、1 2 3 4 5 6 7の七種に分けて見る事が出来る。

右の七種の對比の中、1より6までの六種は、それ／＼對比が單獨に現はれて來る。故にこれを單獨對比と稱する事が出来る。然るに7は前章に述べたやうに、異調色の明度對比を呈すると共に、色の調子の對比や、飽和を増す對比も同時に現はれて來る。これを第一表の式にして示せば、 $\frac{1}{2}$ は實は $\frac{1}{10}$ 又は $\frac{1}{100}$ とならなければならぬ。故にこの7を單獨對比に對して復合對比と稱する事が出来る。

斯の如く、第一表によつて單獨對比と復合對比とを區別する端緒を得る事が出來た。併し第一表は此の區別の細説を畫すに足りないから、此の章に於て更に此の問題を説いて見やう。乃ち第一表に準據して次の第五表を作つて見る。

第五表	
〔一〕光と光との對比	1
〔二〕光と色との對比	2
背景が色・前景が鼠	3
前景が色・背景が鼠	4
背景の色と同明度の鼠	5
前景の色より明るい又は暗い鼠	6
前景の色は明度の對比を受く	7
背景の色と同明度の鼠	8
背景の色より明るい又は暗い鼠	9
色の感得	10
背景の色より明るい又は暗い鼠	11
色の感傳と明度の對比の結合	12

第五表

同調色の明度對比のみの場合.....	(例)淡青と濃青.....	2.....1
色の調子の對比のみの場合.....	(例)赤と緑、樺と鷲(互に同明度).....	4.....2
色の飽和を増す對比のみの場合.....	(例)赤と淺黄(互に同明度).....	5.....1
色の飽和を減する對比のみの場合.....	(例)青と鼠青(互に同明度).....	6.....1
色の調子の對比と異調色の明度對比の結合.....	(例)緑と青.....	4+7.....1
色の飽和を増す對比と異調色の明度對比との結合.....	(例)黄と青.....	5+7.....1
色の飽和を減する對比と同調色の明度對比との結合.....	(例)青と淡青、青と濃青.....	5+2.....1

右の第五表のアルファベットの中、 $b$ は對比の現はれない場合、 $a d f g h i$ は單獨對比の場合、下線を施した $e j$ は復合對比の場合である。(この復合對比の中の $j k$ は既に前章と此の章の初めに説いたものである。)

次に第五表の中の $b$ と $e$ とは繪畫や圖案や工藝品の取扱の上に應用される事を知らなければならぬ。 $b$ は前景の色と明度の鼠を背景とする事で、此の場合に於ては前景の色は何等の對比の影響を蒙らない。故に圖案の臺紙、色布の包み紙繪の額縁等として、此の同明度の鼠がよく用ゐられる。又 $e$ は圓筒で色を覗いて見る場合で、二十八章で述べたやうにゴブラン會社のシユヱリユールが用ゐた方法などに現はれる。圓筒の内側は暗いから、一般に覗いた色は實際よりも多少明るく見える筈である。

三つ以上の復合對比は、右の第五表から推して知る事が出来る。

### 三十一 同時對比と繼續對比 單像對比と二重像對比

#### 緣對比と面對比

對比を分類するのに二つの觀方がある事は、既に第二十六章の初めに述べた。即ち第一は對比の現象に於ける光や色の性質から分類するもの、第二は對比を生ぜしめる方法からの區別である。此の第一の分類に就ては、第二十六章から第三十章にかけてかなり精しく其一般を述べた。此の章に於ては第二の分類法に就いて、極めて概略を説いて見やう。

(一)對比の現象が、同時に現はれると繼續して現はれるとに依つて、之を同時對比と繼續對比とに分ける。(1)同時對比は即ち本來の對比で、悉くこれまでに記述したものである。即ち對比を與へる光や色と、對比を受ける光や色とが、同時に現はれて對比の現象を起すものである。(2)繼續對比と云ふのは、甲の色紙の上に乙の色の消極的殘像を投出して、此の二色が混じた場合を云ふので、既に第十九章『所謂消極的殘像』の終りの節「原像と消極的殘像とで混色を實驗する事が出来る」と云ふ部分で述べた通りの現象である。

(二)對比の現象が單像として現はれる時と、二重像として現はれる時とに依つて、之を單像對比と二重像對比とに分ける(1)單像對比は今までの例のやうに、左右の眼が單一の光や色の像を見る場合である。(2)二重像對比とは同一の刺激(黒地に白の紙)を、兩眼に依つて二重像として見た場合に生ずる對比である。此の現象の本來の名は、側窓實驗と稱へられる。吾々が窓に斜に面して立つて、窓から來る光が一方の眼にのみ入り、他の眼に入らぬやうにする。そして兩眼で黒地に白の紙を見て二重像を生ぜしめる。若し兩眼で見て單像を生ぜしめるやうにすれば、依然として黒地に白であるけれども、二重像にして見ると、窓に近い像は勝色に見え、窓に遠い方は樺色に見える。此の實驗を改良したものは、一方の眼に青色の眼鏡をかけ、他方の眼に鼠色の眼鏡(所謂黒眼鏡)をかけて黒地に白を見て、二重像を生ぜしめる實驗である。一つの像は青色と見えるが、他の像は鼠色でなしに黄色を帯びて見える。此の單像對比を一眼對比と云ひ、二重像對比を兩眼對比とも稱へる。

(三)對比は其作用の分布區域の結果から、之を縁對比と面對比に分ける事もある。(1)縁對比とは、對比を與へる光又は色と、對比を受ける光又は色との相接する縁に於て起る對比で、概して對比は此の縁に於いて著しい。其例は第二十七圖

及び第二十八圖の實驗に依つて知る事が出来る。(2) 面對比は緣對比に對するもので、接觸面より離れた部分に生ずる對比である。

一 色彩の印象	十一 色彩感覺系統の第三方面	廿一 殘像の分類と記述
二 色彩の整理	明度	廿二 光の對比と色の對比
三 色彩の表出	十二 光感覺及色彩感覺の有ゆる變化を同時に示す系統	廿三 光の對比の方法
四 感覺としての色彩	十三 混色法	廿四 色の對比の方法
五 郊外の或る別荘の一室	十四 補色餘色又は反對色	廿五 對比を與へる色と對比を受ける色
六 學僕—眼隱し—自動車—別荘—逆立—隣室の瞥見	十五 中間色及び三基色	廿六 光の對比
七 色彩の分類と記述	十六 餘色關係に歸せしむべき多色混合	廿七 同調色の明度對比と色の感傳
八 光感覺即ち白鼠黒の系統	十七 色彩の適應	廿八 色の調子の對比
九 色彩感覺系統の第一方面—色調	十八 適應と混色との關係	廿九 色の飽和の對比
十 色彩感覺系統の第二方面—飽和	十九 所謂消極的殘像	三十 單獨對比と復合對比
	二十 所謂積極的殘像	卅一 同時對比と繼續對比 單獨對比と二重像對比 緣對比と面對比